

新植地におけるニホンジカの効率的な捕獲技術の開発

平成 26 年度～28 年度（国補）

福本浩士

近年、ニホンジカ（以下、シカ）の個体数増加により農林業被害が増加している。スギ、ヒノキの新植地においても食害を回避するために周囲にシカ侵入防止柵を設置しているが、十分に機能しているとは言えず、今後は新植地におけるシカの捕獲も必要となってくる。今年度は、新植地周辺においてくくり罠で効率的に捕獲するための基礎資料を得ることを目的として、誘引餌を給餌しその効果を検討した。また、移動組立式囲い罠で効率的に捕獲することを目的として、罠設置場所の検討と誘引効果の高い餌の検索を行った。

1. ヘイキューブ（乾牧草）によるシカ誘引効果の検証

度会郡大紀町地内の新植地において誘引餌としてヘイキューブ（乾牧草）4 kg/回を給餌し、自動撮影カメラ（BMC 社製 SG560P-8M）を用いて採食状況を確認した。ヘイキューブ給餌前の調査期間は 2015 年 2 月 13 日～27 日、給餌後の調査期間は同年 2 月 27 日～3 月 20 日である。新植地に設置したシカ侵入防止柵の外側にヘイキューブを給餌するポイントと給餌しないポイントを 1 対として設定し、合計 3 カ所を実施した。表 1 にヘイキューブ給餌前後の撮影 1 日あたりのシカ出現イベント数を示す。ヘイキューブ給餌前はいずれのポイントにおいてもシカの出現は少なかった。ヘイキューブ給餌後はポイント No. 1 1 で給餌前の約 15.0 倍の出現イベントを確認した。対照区であるポイント No. 1 2 においても約 4.7 倍の出現イベントを確認した。これはポイント No. 1 1 へ移動する集団が撮影されたと考えられる。ポイント No. 2 1 では給餌後の出現イベント数は給餌前の約 7.4 倍であった。ポイント No. 3 1 では給餌後に移動する集団が撮影されたが、ヘイキューブの採食は確認できなかった。調査ポイントにおいて出没したシカの最大個体数は 4 頭であった（No. 1 1 と No. 2 1）。以上の結果から、シカの餌資源となる草本類の現存量が少ない 2 月から 3 月にかけてヘイキューブの誘引効果が高いことが確認されたが、その効果は場所によって大きく異なっていた。

表-1. ヘイキューブ給餌前後におけるニホンジカの出現・採食状況

調査ポイント	給餌条件	出現イベント数/撮影日数		採食行為
		給餌前	給餌後	
No.1-1	給餌区	0.21	3.14	有
No.1-2	対照区	0.07	0.33	-
No.2-1	給餌区	0.07	0.52	有
No.2-2	対照区	0.07	0	-
No.3-1	給餌区	0.07	0.10	無
No.3-2	対照区	0	0	-

2. 移動組立式囲い罠の設置場所と誘引餌の検索

移動組立式囲い罠（竹森鐵工株式会社製 サークル D）で効率的に捕獲するための基礎資料を得るため、度会郡大紀町の約 50 ha の新植地において設置場所の検討と誘引餌の検索を行った。今年度は新植地に開設されている作業道横の平坦地に囲い罠を設置した（50 ha の新植地の中央部付近）。囲い罠設置前のシカ出没状況を把握するため、2015 年 2 月 12 日、設置予定場所に自動撮影カメラ（BMC 社製 SG560P-8M）3 台を設置した。同年 3 月 3 日に囲い罠を設置し、3 月 10 日まで枝打ち作業で発生したヒノキ枝葉を給餌した。同年 3 月 10 日～16 日、ヘイキューブ 8 kg（罠の外側 4 kg、罠の内側 4 kg）を給餌した。囲い罠設置及び給餌の前後において、自動撮影カメラでシカは撮影されなかった。次年度以降は、新植地と壮齢林の境界部分に囲い罠を設置する予定である。